様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３４９１

研究課題名（和文）人文主義政治思想史における快楽主義の影響の研究：「徳の政治学」の功利的変容

研究課題名（英文）Hedonism in Humanistic Political Thought: Epicureanism and Virtue Politics in Early Modern Europe

研究代表者
厚見　恵一郎（Atsumi, Keiichiro）

早稲田大学・社会科学総合学術院・教授

研究者番号：００２５７２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、初期近代政治思想史における「徳の政治学」(virtue politics)の系譜的研究の一環として、ルネサンス期の統治者論にみられる快楽主義的伝統（エピクロスやルクレティウス）とキリスト教的伝統（アウグスティヌス主義）の拮抗と接合を解明しようとするものであった。そのために、[1]イタリア・ルネサンスにおけるルクレティウス受容の痕跡をたどることで、古来隠遁的・非政治的であった原子論哲学や快楽主義・原始主義が政治化されていく過程を確認した。さらに[2]北方人文主義における快楽主義への反応を検証すべく、ガッサンディにおける原子論とキリスト教神学との接合を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
統治者や政治家に求められる資質として、西洋の歴史においては、プラトン、アリストテレス、キケロに代表される古典古代の徳と、中世以降のキリスト教的徳とが並立的もしくは混合的に提示されてきた。そうした伝統のなかでいわば傍流であったエピクロス主義の原子論や原始主義（社会進化論）は、近代にいたって、政治的快楽主義の一種として、マキァヴェッリやホッブズの統治論のうちに摂取されることになる。17世紀には、エピクロス主義の原子論とキリスト教とを接合しようとするガッサンディのような人物も登場する。こうした複雑な系譜の絡み合いを理解することは、現代において政治の役割や政治家の資質を再考する一助ともなりうる。

研究成果の概要（英文）：This research aims to investigate the tradition of "virtue politics" in the 16-17 centuries' humanistic political thought. I traced the reception of Lucretius in the Italian Renaissance, through which I verified how atomism, hedonism, and primitivism of ancient non-political Epicureanism became politicized in Machiavelli. I also examined how atomism and Christian theology are associated in Gassendi.

研究分野：政治思想史

キーワード：マキァヴェッリ　ルネサンス　人文主義　エピクロス主義　西洋近代政治思想史　ガッサンディ　原子論　キリスト教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、本研究代表者（以下、代表者）が2007 年に上梓した単著『マキァヴェッリの拡大的共和国』、2011-2014 年度に研究代表者として受けた科研費「初期近代政治思想史における統治進言書の系譜」(23530169)、および2013-2016年度に研究分担者として受けた科研費「デモクラシーと宗教」(25380176)の延長上に、初期近代の人文主義政治思想史における徳論の変遷に、エピクロス主義が及ぼした影響をたどろうとしたものである。

本課題開始に先立ち、代表者は、14-15 世紀イタリアの統治進言書（たとえばペトラルカ）におけるキリスト教的徳論とキケロ的徳論との混交がマキァヴェッリによって切り離され、その後16-17 世紀のイタリアや北方人文主義の反マキァヴェッリ的な君主鑑論でその混交が再登場してくる経緯において、君主の品性よりも統治の結果としての国家の安定と繁栄を最重要視する「政治的功利主義」とでも呼びうる傾向が、17 世紀にいたるまでほぼ一貫して強まり続けたという考えを持っていた。14-16 世紀イタリア人文主義における古代ギリシア・ローマの徳論とキリスト教の徳論との混合・改変・離反を検討するなかで、代表者は、ペトラルカ、15 世紀イタリア人文主義(ポンターノ、マイオ、サッキ、パトリッツィ)、マキァヴェッリの3 者におけるアウグスティヌス主義の受容・改変・拒絶に関心を抱いた。あわせて、初期近代人文主義政治思想によるアウグスティヌス主義の拒絶に際して、アヴェロエス主義とエピクロス主義が及ぼした哲学的影響が大きいのではないかと推測するにいたった。

こうした推測のもと、代表者は、2015 年の論文でルネサンスにおけるエピクロス主義の哲学詩人ルクレティウスの「再発見」がマキァヴェッリにおける宗教批判と政治的功利主義の哲学的土台の一つになっていることを示し、ロックを快楽主義者として位置づけるレオ・シュトラウスのロック解釈を検討した。折しもここ数年でルネサンスにおけるルクレティウス受容の研究が数冊公刊され、さらに「制度の政治思想史」との対比でルネサンスにおける「徳の政治思想史」に着目する研究(J.ハンキンズ)も出てきている。

代表者のこれまでの研究を統合・発展させて、初期近代の「徳の政治学」の系譜――ルネサンス・イタリアの君主鑑論と対抗宗教改革や北方人文主義の君主統治論の双方を含む――における快楽主義の影響を考察し、この系譜を精緻化することを志して、本課題の研究は開始された。

２．研究の目的

本研究の目的は、初期近代人文主義政治思想史にエピクロス主義ないし快楽主義が及ぼした影響を解明することであったが、そのために本研究では、当初、以下の2 つの課題を設定していた。

(1)イタリア・ルネサンス政治思想へのルクレティウス哲学の影響の検証

1417 年のルクレティウス『事物の本性について』写本の「発見」およびその後の流布については、S.グリーンブラット、A.ブラウン、A.パーマーらによる先行研究が2010 年以降相次いで刊行された。本研究はこれら先行研究を補い、特に古来隠遁的・非政治的であった原子論哲学や快楽主義がルネサンス・イタリアにおいていかにして政治化したのかという観点から、ルクレティウス受容の政治理論史的意義を考察する。ルネサンス時代のルクレティウスの手写本と注釈など、写本数点を実際に現地に出向いて参照しながら、近代啓蒙へのエピクロス主義の影響を独自の視点から論じたレオ・シュトラウスによる研究なども手掛かりとして、政治思想史的・哲学的考察を深める。特にルクレティウスの原子論や快楽主義が、<原子運動の曲折による自由意志の発生>という教えを媒介として、統治者論における徳概念の転換（<美徳から力能へ>, <君主の品性重視から国家の維持拡大重視へ>）と結合していく経緯を精査する。

(2)北方人文主義の統治者論における快楽主義の

影響と徳論の功利的変容過程の解明北方人文主義の統治者論については、特に16-17 世紀のフランス、ドイツ、スペインなどにおいて、マキァヴェッリへの反論を意識して有徳な統治の諸原理と支配者の教育を論じる君主鑑論が数多く発表された（リプシウス、リバデネイラ、エラスムス、クリクトーヴ、ビュデ、ヴィンプフェリング、コンツェン、スクリバーニ、オソリオ、サアヴェドゥラ・ファジャルドら）。カトリシズムを含むこれら北方の君主鑑論と、イタリア人文主義の君主鑑論、すなわちパトリッツィ、サッチ、カラファ、ポンターノらのそれをテクストの理念内容レベルで比較するとき、「北方のキリスト教的タキトゥス主義の徳／イタリアの英雄的キケロ主義の徳」という重点の相違は見られるにせよ、両者とも政治共同体の独立安定の手段として徳をとらえる功利的要素を共有している点が興味深い。こうした「功利主義に先立つ政治的功利」概念の成立に対する、初期近代快楽主義（エピクロス主義）の政治化の影響を、イタリア－北方間のインターテクスチュアルな概念追跡だけでなく、テクストや用語の継受関係の文献学的考証をも可能なかぎり援用しながら検証する。イタリアについては、マキァヴェッリ以外にも1468 年に『君主について』をナポリで執筆したポンターノがルクレティウスの写本に修正を施していたことが知られている。北方についても、エラスムスが対話集の「エピクロス派」の中でキリスト教とエピクロス主義を矛盾しないものと考えていたことはよく知られている。しかしながら先行研究において、双方の君主鑑論や徳論を快楽主義の影響の観点から比較したものはほとんど存在しない。イタリアについての研究はフィレンツェ共和主義に集中しがちで、フィレンツェ以外のしかも君主鑑論を扱ったものは、ナポリ人文主義についてのJ.ベントレーの研究などはあるものの、全体として少ない。北方人文主義の君主鑑論についても、反マキァヴェッリ的国家理性論やカトリックの対抗宗教改革政治思想の観点からの研究は数多く存在するが、エピクロス主義（への反発）と北方人文主義政治思想との関連を正面から扱ったものはほとんど見当たらない。本研究は先行の政治思想史研究で扱われていないイタリアと北方の間でのエピクロス主義の思想史的連関を新たに探査し、キリスト教的統治者徳論の側の快楽主義への反発と受容を考察する。もって「徳の政治学」の系譜とその変容を精緻化し、解明することを目指す。

３．研究の方法

基本的には二次研究文献（先行研究）の整理を参照しながら、写本も含めた一次史料を確認し、先行研究の精緻化ないし見直しを進める。その際の分析手法として、対象テクストの理念構成をテクスト内在的ないしインターテクスチュアルに比較読解する哲学的手法をおもに採用しつつ、概念の史的変遷に着目する思想史的手法や、用語の継受関係を実証的に確定する文献学的考証の手法をも援用する。

本研究が人文主義政治思想の統治論のうちに見いだす「エピクロス主義」や「キリスト教の徳論」は、それぞれが一定の内容的一貫性と連続性をもった理念的「伝統」とみなされうるものである。その点では、テクストの主張内容そのものの理念的一貫性や、時代をこえた理念の継承・影響関係を前提とするテクスト内在的な手法は、本研究の目的と合致している。しかし「伝統」相互の間にも持続のなかで衝突や改変が起こる。そうした改変のなかでもひときわ大きな「ルネサンスにおける徳論の近代的転換」の意味を解明するには、政治史的・哲学史的影響をふまえた思想史的手法や、用語の用法の変化を実証的に確認するための文献学的手法も必要とされる。

４．研究成果

以下、各年度に分けて研究の経過と成果を記す。

2016 年度はイタリア・ルネサンス政治思想へのルクレティウス哲学の影響の検証を進めようとした。あわせてイタリア・ルネサンスにかぎらず初期近代ヨーロッパ政治思想へのエピクロス主義の影響を、エピクロス主義の政治化ないし「政治的快楽主義」（レオ・シュトラウス）成立の視点から考察することを目指した。関連する研究文献の収集と読解をおこなった。資料収集面での成果としては、当初マキァヴェッリによるルクレティウス写本を閲覧するためバチカン図書館出張を予定していたが、当該写本全巻の電子データがバチカン図書館のサイトで公開されていることが分かり、ダウンロードすることで資料を 入手できた。知見面での成果としては、関連文献の読解をつうじて、(1)マキァヴェッリ前後のルネサンス・イタリアにおけるルクレティウスの影響の広まり、(2)ガッサンディに代表される17 世紀のキリスト教的エピクロス主義の論理構造、について知見を得ることができた。(1)については、フィレンツェのルクレティウス・サークル（Bartolomeo Scala, Marcello Adriani,Niccolò Machiavelli）にくわえて、ナポリ（Giovanni Pontano, Michele Marullo）やローマ（Pomponio Leto）にもルクレティウス・サークルがあったことである。(2)については、原子論や「弱い懐疑主義」（＝物自体は知りえないが自己の認識は知り得るという根拠に立った自然認識 モデルの確実性）を、「魂の可死性」や「摂理の拒否」といった教えから分離したことが、ガッサンディのキリスト教的原子論やメルセンヌの懐疑論の理論的前提となり、ガッサンディにおける「原子の第一起動因たる神」と「原子の自己運動」の二重原因説を可能にしているのではないか、ということである。

2017 年度は以下の研究活動を実施した。

(1)2017 年6 月にケンブリッジ大学において実施された初期近代イタリア政治思想についてのカンファレンスに参加した。(2)(1)にあわせて、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、オクスフォード大学図書館にて、エピクロス主義者ルクレティウスのルネサンス期における写本調査と史料収集を実施した。この写本調査は、おもにAdaPalmer, Reading Lucretius in theRenaissance, Harvard University Press, 2014の内容に則りながら、ルクレティウス『事物の本性について』のルネサンス期写本作成者による余白への書き込みを通じて、16 世紀前半におけるルクレティウスの読まれ方を確認するために実施されたものであった。パーマーによれば、印刷本が出回る以前の手写本時代のルクレティウスへの書き込みは、文献学的な修正などが中心であり、原子論哲学を提示したルクレティウス第2 巻に注目している手写本は少ない。今回の調査では、この数少ないとされる手写本のうち、PomponioLeto に由来するとされる写本などを写真撮影し、パーマーによって指摘されている該当箇所を確認することができた。(3)関連先行研究論文の読解と研究メモの執筆を進めた。(4)「徳の政治学の系譜」との関連で、ルネサンス・イタリアにおけるユートピア政治思想にかんする次の論文を公刊した。厚見恵一郎「ルネサンス・イタリアにおける反キケロ主義とユートピア」、石崎嘉彦・菊池理夫編『ユートピアの再構築』、晃洋書房、2018 年1 月、30-55 頁、ISBN：978-4-7710-2931-6

2018 年度は、当該課題についておもに以下4点で研究を遂行した。(1)関連研究資料の収集と読解：引き続き関連する国内外の文献資料を収集し、読解に着手した。(2)研究講演会の開催：2018 年5 月19 日(土)に、早稲田大学26 号館地下多目的講義室において、James Hankins 氏（ハーバード大学歴史学部教授）を招聘しての講演会を開催した。メリトクラシーの東西比較の観点から徳の政治学の内容にも言及した内容の講演であり、講演終了後の活発な質疑応答も含め、有益な学びのときとなった。(3)関連学会への出席：2019 年3 月17-19 日にトロントで開催されたRenaissance Society of America の年次大会に出席し、いくつかのセッションを聴講した。(4)論文の執筆：ルネサンス政治思想におけるエピクロス主義の影響についての研究の一環として、

先行研究を参照しつつ、マキァヴェッリと原始主義(primitivism)の関係にかんする論文の執筆を進めた。また、当該課題に関連して、社会思想史学会編『社会思想史事典』（2019 年1 月刊）に項目「マキァヴェッリ」および「人文主義」を執筆した。マキァヴェッリへのルクレティウスの影響を考察する作業の一環として、政治共同体の起源と発生を扱う「原始主義」の伝統のうちにマキァヴェッリを位置づける試みを進めている。政治共同体の自由を維持拡大するための要件として、市民や統治者の理性的・道徳的資質や、諸階層間の均衡による制度的安定を重視するのが、古典古代からルネサンス人文主義期の統治論の流れである。しかしマキァヴェッリの統治論は例外的に、「欲望・葛藤・闘争の制度内的発揚」によって 政体の自由を担保しようとする。マキァヴェッリのこうした特異性を、「原始主義」およびエピクロス主義の影響の文脈で説明できないかと考えるにいたった。

2019 年度は以下の3 点をつうじて当該課題についての研究を進め、その成果の一部を公表した。(1)所属機関において外部講師を招聘しての研究会を主宰した。コンドルセについての講演と討論をつうじて、初期近代の科学史と政治思想史における原子論の影響についても認識を深めることができた。(2)マキァヴェッリにおける内紛の意味について、また、ルネサンスにおける「徳の政治学」について、研究文献の読解と一部翻訳を進めている。和合を妨げる政治的悪として内紛をとらえる古代の伝統と、内紛を制度内での裁判構造に回収しようとする共和主義的立場との両者に反対しつつ、マキァヴェッリが、内紛における非暴力的紛争/暴力的破壊の区別を尊重しながら、そこに気質や情念といった内的性質の要素をも加味して考察していたことが確認された。また、イタリア人文主義政治思想には、「共和派と君主派の対立」や「歴史的レトリック」だけには解消されない豊かな鉱脈があり、それらのうちには、戦争の道徳性、政治における富の適切な役割、支配者による服従の調達、法と制度に及ぼす支配者の道徳的資質の影響、政治的腐敗の諸原因、社会的階層秩序の正当化、エリートの道徳的改革、審議の理論、栄誉と敬虔の社会的役割、徳の果実としての自由、といった諸テーマが含まれる、という主張が近年の研究でなされていることも確認された。(3)2019 年12 月に関西大学において開催されたマキァヴェッリと宗教をめぐる研究会にて、マキァヴェッリへのエピクロス主義の影響についての研究報告をおこなった。とくにマキァヴェッリにおける原始主義に焦点を当てたこの研究報告で、マキァヴェッリへのエピクロス主義の影響が、原子論や宗教の功利的・政治的利用にとどまるものではなく、社会形成についての進化論的観点にまで及んでいることを論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 厚見恵一郎
２．発表標題 マキァヴェッリと原始主義――マキァヴェッリにおける「始まり」の問題
３．学会等名 関西大学法学研究所第55回公開講座
４．発表年 2019年

１．発表者名 厚見恵一郎
２．発表標題 ルネサンス・イタリアにおける反キケロ主義とユートピア
３．学会等名 2016年度　日本政治学会研究大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 石崎嘉彦・菊池理夫編著	４．発行年 2018年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 192
３．書名 『ユートピアの再構築』（30-55頁所収論文「ルネサンス・イタリアにおける反キケロ主義とユートピア」を単独執筆）	

１．著者名 石崎嘉彦・厚見恵一郎編著	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 338
３．書名 『レオ・シュトラウスの政治哲学』（181-202頁所収論文「「近代的自然法の頂点」としてのロック」、271-282頁所収論文「論理嫌い（ミソロゴス）と歴史主義への道――シュトラウスのバーク論に寄せて――」を単独執筆）	

１．著者名 社会思想史学会	４．発行年 2019年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 888
３．書名 『社会思想史事典』に項目「マキァヴェッリ」「人文主義」を単独執筆	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考